

【良い風呂小説合同】

仲居さんマシュとの露天風呂イチャラブドスケベ洗体エッチ

秋特有の澄んだ青空と高い位置に発生する鱗状の雲、黄色や赤色に紅葉した木々という季節感に溢れた絶景に加え、源泉掛け流しの露天風呂という最高のロケーションをしている。温かそうな湯気が立ち昇る水面にも清々しい青空が映し出され、慰安の旅行先としては間違いなく最適解であろう最高の露天風呂であった。

誰もが一度は訪れたいと思える露天風呂には男女の姿があり、桃色のショートヘアを後頭部で一つに結んだ美少女が黒髪の青年に声を掛ける。

「——お客様っ♡♡ お背中流します……っ♡♡♡」

裸のままバスタオルを身体に巻き付けただけという非常に扇情的な格好をしている”マシュ・キリエライト”は、たわわに実った豊満な乳房によって生み出される魅惑的な深い谷間や眩しい位に白くてムッチリとした太ももを大胆に露出していた。タオル越しだが女性的で柔らかな曲線を生み出しているボディラインが一目瞭然であり、ある意味では一糸纏わぬ裸体よりも妄想が捗ってしまうドスケベな格好となっている。

男性だけで無く女性まで魅了してしまいそうなマシュマロボディ、ただその場にいるだけで本能レベルで雄の性欲を強烈に煽ってしまう。

「仲居さんはこんなお世話までしてくれるの？」

「はいっ♡♡ お客様専属の中居ですから……っ♡♡♡」

こんなにも破廉恥な姿をしているマシュが恥ずかしがりながらも披露する相手は世界にただ一人しかおらず、『先輩』と呼んで尊敬しており彼のファーストサーヴァントであることを自負している”藤丸 立香”であった。心の底から愛し合っている恋人同士であり絶対に逆らえない主従関係が完全に出来上がっている二人は、お客様とエッチな専属仲居さんというご主人様とメイドさんのような”プレイ”を楽しんでいる。

「それじゃあ洗って貰おうかな」

「~~~~っっッ♡♡♡♡ はいっ♡♡ お任せ下さい……っ♡♡♡」

『お客様専属の仲居ですっ♡♡♡ どんなことでもお申し付け下さいっ♡♡』

今回は慰安目的で訪れた閻魔邸でマシュが先輩専属の仲居さんとなってお世話をすゝご奉仕ブレイの真っ最中であり、朱色の着物と緑色のエプロンのコントラストが色鮮やかな割烹着を身に纏いながらお客様であるマスターに甲斐甲斐しいご奉仕をしていた。普通の仲居さんとしてお茶を淹れたりお部屋にお食事を運んだりしていたが、メインのお仕事はお客様のセクハラを受け止めたり愛情タップリの性欲処理に他ならない。

——スリっ♡♡ スリィっ♡♡♡ むぎゅっ♡♡ むにゅう〜っ♡♡♡♡

『仲居さんのお尻はムチムチだしおっぱいは柔らかいね』

『あっ♡♡♡ あひっ♡♡ おっ、お客様あ……っ♡♡♡♡ お尻もおっぱいもお♡♡ とっても気持ち良いですうっ♡♡』

割烹着越しにムッチリとしたお尻を撫で回されたりおっぱいを揉みしだかれてもビクビクと肢体を震わせながら悦んで受け入れ、自分のドスケベな身体で興奮させてしまいズボン越しでも分かる位に勃起した魔羅に対して”サービス”の一環としてお愛情タップリのフェラチオやパイズリでご奉仕をしていた。お食事中でさえ机の下で美味しそうに魔羅を根元まで啜え込みながら舐めしゃぶり、お客様のオチンポがイライラしてしまわないように睾丸に溜まったザーメンを常にヌキヌキし続けたのである。

『うん、このお刺身も絶品だ。仲居さんも美味しい？』

『じゅっぽっ♡♡♡♡ ぢゅぷぷう……っ♡♡ じゅずずっ♡♡♡♡ ぷはあゝ ーっツ！！
♡♡♡♡ はあゝ ……っ♡♡ おっ、お客様の逞しいオチンポも美味しいですう……っ♡♡♡♡
ちゅうっ♡♡ ぢゅぷぷう〜っ♡♡♡♡』

そして、鰻や牡蠣などタップリと精が付く昼食を終えたことで夕食までは自由時間となり、マスターは温泉へと向かい専属仲居であるマシュもお背中をお流しするために露天風呂に向かったのだ。誰にも邪魔されることが無い貸し切りの露天風呂という最高にドスケベなシチュエーションが出来上がっており、フェラチオやパイズリ以外での”行為”を期待してしまっている彼女の太ももの内側は愛液でヌルヌルになってしまう。

こうして舞台は貸し切りの露天風呂まで戻ることとなり、仲居さんとお客様プレイが本格的に始まる。

——パサッ

「お客様のお身体は全身で洗わせて頂きますっ♡♡」

恥ずかしそうにしながらも身体に巻いていたバスタオルを取り払ったマシュは、ボディーソープを塗り広げながら泡立てていく。当然だが搗き立てのお持ちのようなデカパイや愛液で濡れそぼった無毛のオマンコが丸見えとなっており、自然光によって照らされている肉感的な美体は健康的なエロスに溢れていた。

余計に柔肌がエッチになってしまうボディーソープが塗り広げられて真っ白に泡立ったのを確認したマシュは、愛する旦那様にしか出さない猫撫で声でマスターに話し掛けながら遅しい背中におっぱいやお腹を押し当てて擦り付ける。

「それではおっぱいスポンジをお楽しみ下さい……っ♡♡ んうっ♡♡♡」

「わっ、私も気持ち良過ぎてえっ♡♡ お” ひっ♡♡♡♡ イっちゃいそうですっ” ～～っっっ
”♡♡♡」

腰のストロークを短く動かしながら浅ましく快樂を貪ろうとするマシュの動きは発情期を迎えた動物のようにドスケベであり、濡れそぼった割れ目にゴツゴツと筋張った腕の筋肉が強く擦れることに耐え切れなかったのか果ててしまう。ビリビリと秘所と頭が痺れてしまうようなエクスタシーを感じながら、身体全体をビクビクと震わせながらオマンコの割れ目からタップリと潮を吹いてしまうのであった。

「あ——っっ”♡♡♡ イクっ♡♡♡ イっちゃいますっ”～～っっ”♡♡♡ おきやくさまのたく
ましいうででえ……っ♡♡ イ” っくう” う” う” ううう” う” うう” う” ～～～～っっっ”
♡♡♡♡♡♡♡」

——ぷっしゅう～～っっ♡♡♡♡ ぷしっ♡♡♡ ぷしゅっ♡♡♡ ぷっしゅうう
ううう～～～～っっっ”♡♡♡♡

露天風呂という場所もあり野外にも響き渡ってしまう蕩け切った嬌声を上げるマシュは、下半身を中心にガクガクと揺らしながらメスのフェロモンをタップリと含んだ淫液をマスターの腕に染み込ませる。彼女は太ももで挟んでいる彼の腕に体重を預けるように脱力しながら、肩やおっぱいを大きく上下させるように荒い呼気を吐いてしまう。

「はあ” ——っっっ”♡♡♡♡ ふう” ……っ♡♡♡ きっ、気持ち良すぎてえっ♡♡♡ イ
ちやいましたあ……っ♡♡♡♡ お” ひっ♡♡♡♡」

「まだもう片方の腕も脚も残ってるけどどうする？」

「～～～～～っっっ”？！！♡♡♡♡♡♡♡ こっ、これはお仕事なのでえ……っ♡♡♡♡ ん
” う” ——っっ”♡♡ 全部洗えるまで頑張りますっ”～～っ♡♡♡♡♡ ん” ひゅう” うう” う
う” う” うう” う” ～～～～っっっ♡♡♡♡♡♡♡」

この後もマシュは粘っこい愛液でビチャビチャになったオマンコをマスターのもう片方の腕や両脚にタップリと擦り付け、何度も堪え切れずに絶頂を迎えながらメスのフェロモンを含んだ淫液でドロドロになるまでマーキングするのであった。四肢を洗い終わったら対面座位で繋がるように身体の前面同士をピッタリと密着させながら上下に淫猥に踊るように動かしながら、彼の鍛え抜かれた厚い胸板に豊満なおっぱいをぬりぬりぬりゆと擦り付けるのと同時に愛情タップリの深い口付けを交わす。

「んちゅっ♡♡ れるるお〜っっ♡♡♡♡ ちゅぶるるう……っ♡♡ ふう” —っ♡♡♡ ふう” ……っ♡♡ ん” ちゅう” うう” う” う” う” う” う〜〜〜っっ♡♡♡♡」

唾液が泡立って口元から溢れてしまう交尾のようなキスをしながら、お客様であるマスターの全身を洗い上げるエッチなサービスは終了するのであった。だが、まだ洗われていない身体の部位が一つだけあり、それはお腹にグイグイと押し当てられている完全に勃起したオチンポに他ならない。

お腹越しに子宮を魔羅で刺激されているマシュは、何度も絶頂を迎えているのに我慢出来なくなってしまう。

「ちゅぶるるう……っ♡♡♡♡ んむっ♡♡ ふはあ—っ♡♡♡♡ んう……っ♡♡ あっ、後はおお客様のオチンポだけですねっ♡♡♡♡ 身体を流したら温泉の中で温まりながらオマンコで洗わせて頂きますっ♡♡♡♡」

「うん、露天風呂に浸かりながら沢山洗って貰うよ」

「〜〜〜っっ♡♡♡♡♡ 誠心誠意っ♡♡ 洗わせて頂きますう……っ♡♡♡♡ んむう〜〜っ♡♡♡♡」

お湯で身体を流す間もマシュとマスターはディープキスを続け、二人が愛し合う舞台は露天風呂へと移るのであった。

チャブチャブと水面が波打ち太陽光に照らされてキラキラと輝いている温泉、その中で両手を縁に突いて脚を広げているマシュの姿があった。オスを誘うようにムッチリとした桃尻を左右にフリフリと振っている彼女は、お客様であるマスターのオチンポを蜜壺洗いするために仕込まれたドスケベなおねだりの言葉を口にする。

うな体勢となってしまう、このままでは顔を含めた上半身が温泉の中でと突っ伏してしまいそうな状態となる。

立ちバックから体位を変えようと考えたマスターはマシュの両脚を大きく開かせながら膝裏を抱えるように持ち上げ、M字開脚背面駆弁という完全に女性側の自由を奪ってしまう体位となつて下からオチンポを突き上げた。

——ドッチ ユンっっッ !!!!!♡♡♡♡♡♡

「おっ きゅう う ううう う うう う ——っっッ♡♡♡♡♡♡ しっ、しきゅうにたいじゅうがかかってえ……っ♡♡♡♡ ん ほお おおお お お お おお お ~~~~~っっッ♡♡♡♡」

「好きなだけ気持ち良くなって良いよ。もっと子宮ズンズン突いて上げるっ」

「気持ち良過ぎておかしくなっちゃいますうっ♡♡♡♡ いっ、イクの止まらないですう うう う う うう う ~~~~~っっッ♡♡♡♡♡♡」

抱き抱えられたマシュは完全にドスケベオナホールとなつてしまい、子宮を突き上げられ続けてポルチオアクメを迎え続ける。おまんこから噴き出した潮が石畳の床をビチャビチャに濡らすこととなり、深く挿入される度に彼女の滑らかなお腹にポコッとオチンポの形が浮かび上がる。

絶頂を迎える度に更に深い絶頂を迎えてしまうマシュに対して、射精が近付くマスターはそのことを宣言しながらピストンを激しくするのであった。

「俺もイキそうだよ。仲居さんは奥で受け止めてくれる？」

「~~~~っっッ ?!!!!♡♡♡♡ うっ、受け止めましゅっ♡♡ い ひっ♡♡♡ 奥でいっぱい出して下さい……っ♡♡♡♡」

「それじゃあ遠慮無くっ!!!」

巨大で硬い亀頭によって子宮口を抉じ開けるような深いピストンが行われ、中出しという一番気持ち良い瞬間に向けて二人の気持ちは高まっていく。

——ズッチュンっ!!!!♡♡♡ ドチュンっ!♡♡ ドッチュンっ!!!!♡♡♡♡

「射精すよっ。いつもみたいに子宮で受け止めるっ」

「だっ、だしてださいっ♡♡♡ いっばいおくでえ ——っッ♡♡」

プと盛れるように溢れてしまっているのだが、超が付く絶倫である彼の逸物はガッチガチに怒張したままとなっている。

「もっと仲居さんのオマンコで洗っても良い？」

「~~~~っっっ♡♡♡♡ おっ♡♡ お好きなだけえ……っ♡♡♡ ん お
——っっっ♡♡」

こうして夕飯の時間が来るまで二人はタップリと露天風呂を楽しみ、夜は布団の上で動物のような交尾が繰り広げられるのであった。

「また仲居さんになりたいです……っ♡♡」

すっかり専属仲居さんにハマってしまったドスケベマシュが、定期的にこのプレイを求めるようになったことは二人だけの秘密である。